がんばれ!!

新連携・地域資源活用・農商工連携

第49回

会津張り子の継承と革新

中小企業基盤整備機構　経営支援部　経営支援課　課長代理　二宮　健晴

紹介事例の概要

会　社　名	野沢民芸品製作企業組合
認定区分	地域資源
認定事業名	会津張り子の伝統技術が創るプレミアム志向「面」製品の開発と販路開拓
認　定　日	平成27年２月２日

「ムンク」と起き上がり小法師のコラボ

平成25年４月、ある郷土玩具が渋谷ヒカリエで注目を集めた。ノルウェーの画家エドヴァルド・ムンクによる有名な「叫び」をモチーフにした起き上がり小法師である。ムンク生誕150周年を記念して、スカンジナビア政府観光局が渋谷ヒカリエで２週間限定の「カフェムンク」をオープンさせ、そこで限定販売されたのが「起き上がりムンク」である。意外性とユーモラスな組み合わせから、インターネットであっという間に話題となったが、その製作者が今回ご紹介する野沢民芸品製作企業組合である。郷土玩具を製作する地方の企業組合が、なぜこのようなコラボ商品を手掛けることになったのか、同組合の足跡をたどっていきたい。

「起き上がりムンク」と「あかべこ」

後発の会津張り子製作者として

同組合は昭和37年に福島県西会津町野沢で設立された。当初は、こけしを製作していたが、現在も代表理事を務める伊藤豊氏の経営判断により、昭和40年から会津張り子の製作を開始した。会津張り子は、約400年前に会津藩主の蒲生氏郷が、会津の殖産振興のため京都から人形師を招き、下級武士たちに技術を習得させ、売り出したことが始まりとされる。会津張り子として代表的な赤べこの製作はすぐ売上につながり、こけしにとって代わる主力商品となったが、一方で従来からの手作業に頼っていたため生産量に限りがあった。事業として拡大していくには、張り子の木型の生産力向上が必要と判断した伊藤氏は、昭和46年に思い切った設備投資を行い、イタリア式８軸式倣い彫刻機を導入する。機械で原型をなぞることにより８個の木型が生産できるというもので、これにより張り子の生産性が飛躍的に向上した。40年経った今も現役で稼働しており、組合の経営基盤確立に大きく寄与する設備投資となった。その後、会津地区への観光客増大に伴い、土産品として赤べこの売上は更に増大。家内工業のこけし製作から出発した組合であったが、後発だったにもかかわらず、会津地区の張り子メーカーとして躍進していくことになった。

機械化により躍進した組合であったが、一方で、糊付けや絵付けなどの作業は職人が一つずつ丁寧に仕上げる従来の方法を踏襲し、画一的な工業製品ではなく民芸品としての伝統の良さを守り続けている。組合はその後、全国各地の

郷土玩具に注目し、これらの試作、商品化やOEM生産にも取り組み、販売先を会津地区のみならず関東、関西へも拡大した。さまざまな民芸品を手掛けて全国へ供給した結果、多様なデザイン、商品化のノウハウが組合に蓄積され、やがて予期せぬ依頼を受けることになる。

会津張り子の絵付けの様子

コラボの理由とその影響

土産品の多様化や低価格輸入玩具の増加等により、国産の民芸品製作者を取り巻く環境は厳しさを増し、廃業する同業者も少なくなかったが、同組合は、干支の張り子、NHK大河ドラマ「八重の桜」をモチーフにした新たな赤べこの開発など、積極的な新商品の開発と経営努力を重ねていった。

そんな中、冒頭の起き上がりムンクの話に至る。ムンク記念プロジェクトの商材を探していたコーディネーターの目に、組合の商品が留まったのである。組合が製作してきた起き上がり小法師やその他の郷土玩具から、高品質かつ多様なデザイン、生産に対応できると判断されたのだった。会期中限定の商品として1000個を受注し、わずか2週間で売れるかという不安があったが、名画と民芸品のユニークなコラボ商品は、瞬く間に売り切れ、問合せの電話が組合に殺到した。起き上がりムンクは、単に組合の認知度を高めたのみならず、組合にとって、今までにない顧客からさまざまな反応を受けて、これまで気付かなかったニーズや自分達の強み、そして新規顧客開拓の重要性に気付く大きな転機となったのであった。なお起き上がりムンクの売上の一部は、東日本大震災福島こども寄付金に寄付されている。

会津張り子の新たな可能性

組合はその後、福島県中小企業団体中央会の事業を活用して、地元大学とのコラボ商品開発やギャラリーの設置に取り組むなど、積極的に今後の可能性を探りながら事業展開している。そして今年2月に地域資源活用事業計画の認定を受けて、新たな取組みをスタートさせたのが、会津張り子による能面の開発である。長年、親しみやすい郷土玩具を幅広く手掛けてきた組合であるが、伊藤代表理事は、かねてから張り子で培った技術により日本古来の伝統芸能の能面を作りたいという思いがあった。一般的な木彫りと異なり、紙を主材料とする張り子の特性により、経年劣化による割れ等が発生せず、塗装も深みを増す傾向にあり、これまでになかった観賞用としての能面ができあがる、ということである。会津張り子の新たな可能性を示す商品として、国内のみならず外国人観光客向けの土産品としても期待されている。

設立当初から西会津町を拠点として、職人の手による民芸品の製作にこだわりつつも、時には大胆に機械を導入し、また斬新なデザインやコラボ商品を生み出すなど、同組合の取組みは伝統産業の行く末を考える上で、真に興味深いものがある。2020年の東京五輪開催にあたって、日本各地から世界に向けてさまざまな情報が発信されるだろうが、その時、組合はどのような提案を行うのか、今から楽しみである。

伊藤豊　代表理事

お面製作の様子